

仮面法廷

和久峻三

仮面法廷

和久峻三





著者略歴 昭和5年7月10日生まれ。昭和34年京都大学法学部卒。中日新聞記者を経て、昭和44年から京都で弁護士を開業。

本名 滝井峻三

現住所 京都市東山区山科土仏町11-70

仮面法廷

昭和47年8月21日 第1刷発行 550円

著 者 和 久 峻 三

発 行 者 野 間 省 一

発 行 所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 1 1 2

電話東京 (03) 945-1111 (大代表)

振替東京 3 9 3 0

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社 国宝社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© Shunzo Waku 1972

0093-301161-2253 (0) (文2)

目次

第一章 女地面師

五

第二章 第一の殺人

六

第三章 公判

一〇

第四章 第二の殺人

三二

第五章 謎の女

三九

選考經過報告

三七

装 幀
イラスト
中井幸一
和田朋子

仮
面
法
廷

第一章 女 地 面 師

一

取引価額十億に達する土地売買成立の見通しが確実となつて、黒川土地住宅株式会社社長の黒川軍司は上機嫌だった。

「会社設立早々に、こんなボロ儲けの口が転がりこんでくるとは、わが社の先行きは、めでたし、めでたしやな」

「全くです。わが社はこの取引で業界の信用を一举に獲得したわけです。会社の基礎はこれで固まったも同然でしょう」

専務の玉木造は相好をくずして相槌を打った。

社長と専務が有頂天になるのも無理はない。黒川土地住宅株式会社は、つい一ヵ月まえに設立された赤児同然の会社で、資本金は僅か百万円。役員は社長の黒川と専務の玉木のほかに取締役と監査役が各一名。いずれも社外から名前だけ借りているペーパー重役である。従業員はお茶汲みの女の子と高校を出たばかりの運転手。つまり会社の陣容は重役二人と社員二人というわけで、合計四名が十坪ばかりのビルの一室に間借りしている有様だ。とにかくにも法律上は株式会社の体裁をととのえてはいるが、その実態は社長の黒川と専務の玉木の純然たる個人企業である。そんな、ひ弱な新興不動

産業者が、創立早々に十億円の取引成立にこぎつけたのだから、世間の目からみれば、薄気味悪くらしい破天荒な出来事である。

「しかし、この取引はあんたが資力のある買手をみつけてきてくれたおかげで成立にこぎつけたんやからね。あんたの実力の賜ものや。感謝しまっせ、ほんまに」

社長の黒川は手放して喜んでゐる。

「いや、そうじゃありませんよ。社長が売手を、うまく口説き落したからですよ。不動産業界は、なんととっても、目下のところ、売手市場ですからね。売手に土地を手放す気持がなければ取引はできません。とりわけ、こんどの取引物件は琵琶湖大橋を眼下に見下す絶好の場所ですから。整地もほぼ完了していることだし、売手は強気ですよ。これを口説き落したんだから、なんと言つても社長の貫録が絶対ものを言っています」

「そういうもんかな」

と黒川は軽くうけ流して

「まあ、どっちの手柄なんてもんやのうて、わしら二人のチームワークのなせるわざや。今夜は、せいぜい、心おきなく散財しようやないか。——ほな、わしは、この可愛い子ちゃんといっしよに、そこいらを歩いてくるさかいにな」

と黒川は傍そばの小柄なホステスの細い腰に腕を回して立ち上った。

「ぼくは飲むほうが性に合ってますからここにいます。どうぞ、ごゆっくり、社長」

と玉木は、女の子をかかえこむようにしてホールへ向う黒川の背中に声をかけた。

黒川は自分の娘ほどの若い女の子といっしよに、血のように真っ赤な照明の下で愉快そうに「ゴーゴ」を踊りはじめた。

黒川のことを社長と呼ぶのは、玉木にしてみれば、なにがしかの違和感がつきまとう。それという

のも、もとはと言えば、黒川は玉木の勤め先の不動産会社に入入していた、ただの不動産屋のおやじにすぎなかったからである。当時、玉木は業界では多少、名の知れた東洋不動産という信託銀行系の不動産会社の営業課長の職にあった。だから「なんぞ儲かる話はおまへんか」と、もの欲し顔に、もみ手で御用聞きにやってくる黒川ごとき出入業者に、いちいち氣を使う必要はなかった。

だが、数多い出入業者のなかで、黒川軍司だけは、他の業者とは違った不思議な魅力を感じさせる、なにかをもっていた。

黒川軍司は中肉中背、頭髮はやや生えあがり氣味で、皮膚は白くも黒くもなく、卵形の顔に、ありきたりの眼と鼻がついている。こういう外貌からは、なにひとつ目立った特徴を数えあげることのできない平凡な、極めて平凡な中年男にすぎない。ところが、この黒川と話しこんでいるうちに、相手は言うに言われぬ魔力のようなものにとりつかれ、つい、彼の話術のペースにとりこまれてしまうのである。黒川の世間話の話題は競馬競輪から女の話やエロ談義に及ぶが、話題そのものに特別のめずらしさがあるわけではないのに、話しぶりの巧みに、聞き手はつい引きこまれてしまう。

黒川は玉木を、ちよくちよくクラブやバーに誘った。当初、それは出入業者がお得意先の会社の課長を招待するだけのものにすぎなかったのが、回数が重なるにつれて、単なるつき合いの程度をこえて、プライベートな心のふれ合いを玉木に感得させるまでに二人の關係は進展していった。

黒川は玉木より十年は年長者であったから、友情というものは少し違っていたが、いわゆる世間という「おれと、おまえの仲」に近づいていた。

あるとき、黒川軍司は玉木を料亭の奥まった一室に招いた。玉木が出かけていくと、黒川は先きに来て玉木を待っていた。

「今夜は、折入って、あんたにお願いがありますんや」

と黒川は、あらたまった口調で運ばれてきた酒や料理にまだ手をつけないうちから、きり出した。

「こういう大事な話は、酒をのまんうちに、せにやならん、と思うてな」

「いったいなんですか？」

「思いきって言わしてもらいますわ。実はな、こんど会社を一つ、こしらえようと思うてな。不動産会社ですわ。このことは、以前から計画をたて、いろいろ構想もねっていたことなんやけど、あんたに打ち明けるのは、これがはじめてや」

「それで？」

「会社をつくるについて、あんたの助力が是非、必要なんや。この際、ひと肌ぬいでもらえんやろかと思うてな」

「ひと肌ぬぐとは？」

「役員として参画してもらいたいんや。そりゃ、あんたは、立派な会社の課長さんや。前途あるお方や。そのお方、をちっぽけな企業に引きぬこうなんて考えを起こすわしが間違っている。実に非常識な奴やと、あんたは笑うやろう。その通りや。しかし、それでも、なお、あんたに、こうして恥をしのんで、頭を下げますのんや」

黒川は食卓の上に骨太の掌をのせ、はえあがった薄い頭を玉木に向けてなんども下げた。ふしくれだった指にダイヤのリングが光っていた。

黒川のねらいは玉木にはわかっていた。玉木の勤め先の東洋不動産株式会社は、信託銀行から分離独立して、でき上った不動産会社で東西の証券市場には二部上場しているくらいだから、取引先の筋はよい。その筋のよい顧客のたとえ一部分でも、自分の会社の方へ、とりこむことができれば大助りだ。玉木を新会社の重役に迎えることができるなら、そのねらいは当る。黒川軍司はそう考えて、玉木を口説き落しにかかっているのだ。

「なあ、玉木さん。わしとあんたが本気で力を合せたら、新会社は成功すると思うんや。あんたには

営業課長として築きあげた顔と信用がある。大学出て学問もある。わしには、その持ち合せがないけれど、多少の金もつています。この二つを結集したら、すごい威力を発揮するのんと違ひますか？」

黒川は、たたくみかけるように言った。

よく考えておきましょう、と返事して、その晩、玉木はバーやクラブでの二次会への誘いを断つて帰宅した。

一週間後に玉木は黒川の申出を承諾した。二人が力を合せば新会社は成功する、という黒川の言葉に、玉木は賭けた。近ごろ流行の脱サラリーマンではないが、とにかく成功すれば小規模ながら一國一城の主である。黒川が事実上の出資者である以上、社長の椅子は当然、黒川のもので、玉木は専務ということになるが、実質的には黒川と玉木の共同事業であるから、利益は山分けという約束で新会社は発足した。従つて二人の持株数もそれぞれ同数である。

もちろん、この新事業が失敗の憂き目を見たときの惨さ（うじめ）を考えないわけではなかったが、そのときは一から出直すだけのことで単純に割切った。これは玉木にとっては、冒険であつた。いろいろと不平不満はあつても、会社勤めは安定している。無事に勤めてさえいけば食うには困らないのだ。しかし、いま、玉木はあえて、その安定した職場を放棄して、吹きさらしの荒野へ乗り出そうというのであつた。

男が、そうした冒険に踏み切ろうとする場合、妻や子や家族の安泰が犠牲になるかもしれないという不安感から、決心が鈍り後髪を引かれることになり勝ちであるが、いまの玉木は、そうしたことは無縁であつた。彼は愛児を失い、妻は彼のもとから去つてしまつていた。失敗の責任は自分ひとりで負えばよいのだ。

こんな経緯で玉木は黒川軍司を社長と呼ぶようになった。そして、期待どおり二人のチームワークは見事に結実した。黒川は十億円の取引の売手を見つけ、玉木は買手を仲介した。その取引日を数日

後に控え、二人は前祝いとあつて、大阪キタのナイトクラブにくりこんで散財をはじめたのである。

黒川はまだホールから戻つてはこない。

バンドの演奏はブルースに変わっていた。

「踊りましょよ」

胸の大きく開いたバラ色のドレスの女に玉木は誘われた。

「うん」

と答え、女を抱くと、すべすべとした絹のような感触の白い胸の隆起が眼の下にあった。黒川は例の小柄な女とふざけながら踊っている。女はきヤツ、きヤツと小猿みたいに嬌声をあげて、黒川の腕にぶら下るような恰好で踊り回っている。女の肩越しに黒川は玉木に向つてウイंकしてみせた。四十八歳の男の顔が無邪氣な幸福に輝いてみえる。自分も同じ顔に見えるに違いない、と玉木は思った。屈託のない遊興の楽しさというものを、はじめて知ったように思える。それは自分の腕と才覚で稼いだ金で遊んでいるのだ、という充実感からくることかもしれない。取引先の招待で遊んでいるわけでもなく、会社の必要経費と称して会計課の目をごまかしているのでもない。いままでは、遊興となると、そのうちの、どちらかの手口しかなかったのであるが、そこには、たえず後めたさ、というか卑屈さのようなものが、心の奥につきまといつていた。しかし、いまは違う。遊びの気易さと満足感が彼の心を充^みていた。

数日後に十億円の取引が行われる。買主から売主に金が支払われると同時に、土地の登記名義は買主のものになる。登記の手続きは司法書士に委せるのだから、黒川土地住宅株式会社としては、取引に立会うだけでよいのだ。ここまでくれば、すべては終つたも同じだ。これがきっかけとなつて、ひき続き、第二、第三の巨額の取引がごろりこんでくる見込みは十分にある。のっけから、ことが余りにうまく運びすぎては、後^{あと}が恐い、というような分別くさい警戒心は微塵^{みじん}も起つてはこなかった。

取引は十二月十日午前十時に、売主買主双方が老松町の黒川土地住宅株式会社の事務所に参集して行うことになった。

買主をあっせんしたのは玉木であるから、彼は社員に命じて会社の車を買主宅までさしむけたところ、ほとんど、入れ違いに買主のほうから運転手付きのリンカーンで定刻よりも前に出向いてきた。

買主は金村辰之助という五十五歳の男で、阪神各地にボーリング場、ガソリンスタンド、ゴルフ場、レストラン、ホテルなどを所有し、十億や二十億の金は、電話一本でその日のうちに都合できる実力をもっている。玉木は東洋不動産の営業課長時代から、この金村と知り合いて、以前に東洋不動産の物件を金村に世話したことがあった。その土地と建物は、いま大阪市内ではトップクラスに入るボーリング場になっていて、金村は玉木と顔を合せるたびに、そのことを話題にし、世話をした玉木に感謝の言葉をもらす。

「こんどの物件も玉木さんの紹介やから、きつと、ええ芽が出まっしゃろう。いや、ほんまに、ありがと、ありがと」

金村は大阪商人らしい磊落さで言うと、出っぱった大きな下腹を、どっかとソファにすえた。金村は持前の度胸だけで今日の財を一代にして築きあげたといわれる。それだけに頭のなかは至って単純な男で、こうと決めたら、がむしゃらに突進する性格のようだ。こんどの十億の取引にしても頭から玉木を信用しきっている。玉木が持ちこんだ物件だから間違いないと単純に思いこんでいるのである。

「売主の上村卓さんが、まだ見えんようやが手配はしてあるんやろうな」

金村は念を押すように言った。

売主は黒川のあっせんだから、上村卓を同行するのは黒川の役目であつた。

「社長が上村卓さんをお連れすることになっておりますから、少々、お待ちを」

と玉木は時刻を気にしながら、金村の機嫌をとりつくろつた。約束の午前十時を二十分も過ぎてゐるのに、黒川も売主も姿をみせないの、玉木もそろそろ氣をもみはじめていたところであつた。

「かまわん。なにかの都合で遅れるんやろう。わしは氣の長いほうやからな」

と金村は、おおらかに葉巻をくゆらせていたが、そのあと、さらに四十分も時間を無駄に空費させられたのがわかつてくると、おのれの忍耐にも限度があると言わんばかりに、氣ぜわしげに、わざとらしい咳払いをはじめた。

そのとき、社長の黒川が、たった一人で姿を見せた。

「上村さんはどうしました？」

玉木は別室で黒川にたずねた。

「うん。奥さんは東京で急用ができて上京したというこっちゃ」

黒川はけろりとしている。

「そんな無茶な。じゃ、ここへはこないんですか？ 金村さんは十時まえからきて待っているんですよ。この大切なときに上京だなんて。すると、あの奥さんは、この取引を引き伸ばすつもりでいるのかもしれないよ」

「そんなことはないやろう」

「上村卓さんはどうなんです？ 売主本人が顔を出せばよい。元来はそれが筋だ。もともと、この取引では、売主自身は一度も顔を見せないで、いつも、奥さんが代理しているんですよ。せめて今日ぐらい、売主本人が姿をみせてしかるべきですよ」

「奥さんの話では、上村さんは、奥さんに全部委せつきりで、こういう場所には出たがらない、という

きつちゃ」

「それは前から聞いています。ぼくだって、上村さんの顔は知らない。金村さんにしても、今日は売主本人に会うつもりで、ここへきているんですよ。それが、売主はむろんのこと、代理の奥さんさえも姿を見せないというんでは、金村さんが承知しませんよ」

「心配せんでええ。ほら、この通り上村卓の実印を預ってきた。印鑑証明も権利証も、ちゃんと渡してもろうてきたのや。これだけ、そろっていたら文句ないやろ」

「ちょっと見せて下さい」

玉木は実印の印影と印鑑証明のそれとを念入りに照合した。びつたりと符合する。権利証も調べた。権利証のうえでも本物件の現所有者は上村卓であることがわかる。書類上すべて問題はなかった。念のため権利証に押捺されている法務局の登記済証印の登記受付年月日及び番号と登記簿謄本の年月日及び番号を照合してみたが、これも間違いなかった。

「とにかく金村さんに、ぼくから話をしてみます」

と玉木は言い、金村の待っているソファのほうへ進んだ。

「金村さん、長らくお待ちして申し訳ありません。実は売主の上村卓さんが、急用のため、今日のところは、お目にかかれないうです。しかし社長が上村卓さんの実印、印鑑証明、権利証を預ってきております。ですから、今日、代金の支払いと引換えに本物件の登記名義を金村さん名義に移すことはできます。それで、この取引はすべて完結しますが、どうなさいますか？ それとも取引日を後日に延ばし、上村卓さんと直接面会されてから取引なさいますか？」

言われて金村は

「どうしたもんかいな？」

と思案顔になった。金村がこの物件を喉から手の出るほど欲しがっていることは、玉木にはわかつ

ていた。取引日が延びると、その間に売主の気持が変って、もう売らないと言い出さないと限らない。不動産の取引には、ときどき、そういう事態が起る。利に敏い金村だ。そういう事態の変化を考慮に入れないはずがない。なによりも金村は商売人である。できれば、今日のうちに取引をすませたいと考えているに違いない。

「実印と印鑑証明は間違いなく預ってきたんやな？」

金村は念を押した。

「はい。このとおりです。権利証もそろっています」

玉木が差し出すと、金村は手にとって、いま玉木がやったと同じように印影の照合やら、権利証の確認をしていたが、それがすむと、これで納得がいった、と言わんばかりに明るい表情になって

「よろしい。取引をすませることにしよう」

と言い放った。

「しかし、金村さん。なにしろ大きな額の取引ですから、金をお支払いになるまえに売主に会っておかれたほうがよいのではありませんか？」

「その必要はないやろう。金を払って所有権の登記がわしの名義になれば取引は終りや。土地はわしが、なんども、この目で検分して確かめてあるんやから問題はない。とにかく、玉木さん、わしは、あんたを信用して、この物件を買うことにしたんや。売主自身よりも、あんたを信用してゐるんやから、わしは安心して取引できる」

金村は、やはり大阪商人らしく、割切ったものの考え方をする。決断も早かった。要するに、金を払って物を買う、ただそれだけのことである。相手の顔など見なくても、品物さえ手に入ればそれでよいのである。

しかし玉木が気にかかることは、金村が玉木に対し「わしは、あんたを信用して、この取引を決め